

住民自治の伝統が築く生き活きとした歴史都市「今井町」～奈良県橿原市～

大和三山や藤原京跡、神武天皇陵などを擁する奈良県橿原市は、「記紀」「万葉集」にもたびたび登場し、飛鳥、桜井とともに神話や日本建国の時代からの歴史を刻む歴史とロマンの都市である。

その中で「今井町」は、江戸時代からの町家・町並みのたゞまいを、今も生活の中で残している。国指定の重要文化財が9件、県指定と市指定の文化財がそれぞれ3件と6件あり、文化財の多さも全国有数であるが、何より特筆されるのが、今でも、600軒余りの町家の大半が江戸時代の姿を残し、その中で日々の生活を営みながら町を守ろうという姿勢であろう。

中世の歴史を今に伝える今井町

現在の今井町の原形が形作られたのは、武士団の勢力争いが盛んな室町時代末期、自衛集落としての環濠集落へと変貌して行く過程といわれる。

1500年代の半ばになって、浄土真宗が大和に進出し、後の「称念寺」を核とした今井寺内町が形成されることになる。寺内町は、寺院の四周に堀をめぐらせ、土居を築いた環濠集落であるのが特徴で、当時は、訴訟や裁判などで独自に町を運営し、税制面などの経済的特権も認められていた。

戦国期が終わり豊臣の時代に入ると商業都市として興隆することになり、「海の堺」「陸の今井」と並び称されるほどの大商業都市として栄え、江戸時代初期には、東西600m、南北310m、周囲には環濠土居が築かれ、戸数1,100軒、人口は約4,000を超える財力豊かな町に発展した。

また、自治特権は大きく残され、惣年寄と呼ばれる町を代表する3家が町を治めていくようになる。惣年寄には、死罪を除く司法権、警察権も与えられ、また、町民自らが「町掟」を定めてルールを作り、年貢上納、家屋や田地の売買、消防等々に関する厳格な規定のもとで自治が行われていた。

この自治が許された背景には、今井の豊かな財力があったといえる。堺・大阪との交流もますます活発化し、多数の大商人が生まれ、大名貸、蔵元、掛屋、両替商、その他、米・酒・味噌・油・肥料や嫁入り道具を扱う店などが軒を連ねた。町民文化の気運も盛り上がり、自由闊達な自治の精神はますます高まり、町に根付いていったといえる。

そして、明治維新を迎え、諸大名、武士の凋落



「灯火会」でライトアップされた今井まちなみ交流センター「華薨」と、昭和32年に重要文化財指定された「今西家住宅」(写真提供：今井町並保存整備事務所)



とともに、大名貸が無効になるなど大きな打撃を受けることになり、また、昭和に入っては、鉄道路線から外れることによって商業地区としての機能は失われ、静かな住宅地となっていった。

今日に至り、旧環濠内にある600余軒の民家のうち、約500軒が江戸時代からの伝統様式を伝える町家として残っている。慶安3年(1650)築造の今西家をはじめ、建築史ともいえる町家が数多く建ち並び、今なお、町全体が戦国期の寺内町の歴史の重さをずっしりと感じさせており、うち9件が国の重要文化財に、3件が県の文化財に、6件が市の文化財に指定されている。

そして、昭和50年の文化財保護法の改正によって、伝統的建造物群及びこれと一体をなしてその価値を形成している環境を保存しようとする制度ができ、今井町は、寺内町として、平成5年12月に「重要伝統的建造物群保存地区」に選定された。

住民による町家文化財の見直しと活発な議論

現在に残る多数の町家を保存しようとする契機となったのが、昭和30年に行われた、東京大学の「町家文化財」の調査である。これにより、江戸期からの歴史的なたたずまいを残す町並み、また、それだけではなく、先人の知恵がいたるところに残る建築技術資料としての価値も見直された。

また、当時、「今井町史」の編纂が行われたことで、今井の歴史を見直す動きが広まり、相次いで、今井町内外の有志、識者などを交えた保存グループが発足し、文化講座の開催、冊子発行などが活発化した。

■「今井町町並み保存会」の誕生へ

保存活動が立ち上がる中で、現在に至るまで重要な役割を担うのが、「今井町町並み保存会」である。

昭和40年代に入り、全国各地でも町並み保存の動きが活発化したが、今井町でも様々なグループの活動が見られた。

その中、あくまで住民主導による町並み保全を考えると、「今井町町並み保存会」の前身である住民団体「今井町保存問題に関する総合調査対策協議会」（通称「今井町住民協議会」）が発足した。

協議会は、檀原市との協議の場となり、市の「今井町保存整備基本構想」の策定や、「今井町町並み保存対策費補助金交付要綱」制定等に至っている。

その後、伝統的建造物群保存地区決定を視野に入れ、全国の研修視察などを行うほか啓発活動に努めてきたが、昭和60年代に入り、アンケート調査などで、住民の意思が町並み保全に固まったものと判断し、名称を「今井町町並み保存会」に変更した。

ただ、積極的に保存していこうとする考え方の一方で、個人の家に対する規制や、行政が関与しない自由な保存、借家の保存の困難性などについて再考していこうとする考え方も急速に浮上した。そこで、さらに議論の必要性が高まったことから、平成3年に行政と住民全戸参加の協議機関「今井町町並み保存住民審議会」が発足し、現在に至るま

今井町町並み保存会主催の「今井まちなみ散歩」は今年もにぎわった。
(写真提供：今井町並保存整備事務所)



公開されている重要文化財「旧米谷家」住宅
(写真提供：同上)



電線地中化が施された今井町の夜景
(写真提供：同上)



今井町町並み保存会の拠点となっている今井まじづくりセンター

で、町並み保全に関する意思決定機関となっている。

このように、難しい問題にも直面してきたが、行政主導ではなく、行政に対してきちんと主張すべきことは主張し、住民の総意で決定するところには、住民自治の伝統が息づいているといえる。

そして、平成5年に重要伝統的建造物群保存地区に選定されることとなったが、住民の意思により閑静な住宅地を目指すものとされた。

■檀原市教育委員会「今井町並保存整備事務所」

今井町の町並み整備について、様々な条例が制定されたが、今井町並保存整備事務所は、それに基づいて主にハード面の整備や支援を行う施設である。

檀原市では、昭和50年代から町並みの計画調査や整備事業を本格化し、市単独でも老朽建物の

修理や町並み修景に取り組んできたが、歴史的町並み保全と住民の利便を両立させるため、平成2年から、国の歴みち事業（歴史的地区環境整備街路事業）に着手し、道路の美装化や側溝の整備が行われ、歴史的な町並みにふさわしい道路整備を進めた。

平成5年には国の「街なみ環境整備事業」が創設されたのに伴い、これにより、町家の改修・修景、電線地中化、環濠整備、小公園、防災施設等の事業が行われたが、現在では、これらの事業を含めて、修理の完了した町家は2百数十棟にのぼり、全国でも突出した多さである。しかし、今後も、電線地中化や、ますます厳しくなる空家・空地対策などに、待ったなしの活動が迫られている。

今井町のまちなみ整備事例と散策のポイント

今井町の町並みの保全にあたって、橿原市等により歴史的な町家が改修され、公共施設として利用されている施設があるほか、景観に配慮した小公園や広場などが多数整備された。その主なものは次のような施設であるが、住む人々、訪れる人々が楽しみ、安らげるポイントとなっている。

◆今井まちなみ交流センター「^{はないらか}華甕

明治36年築の旧高市郡教育博物館、昭和初年からは今井町役場として利用された建物を再生したもので今井町のビジターセンターとして位置づけられた施設。今井の歴史、町並みに関する情報を、展示コーナー、映像シアターで入手できるほか、図書閲覧室では今井町の歴史や全国の町並み保存運動についての情報などを提供している。

◆今井まちづくりセンター

老朽町家を橿原市が譲り受け再生したもの。耐震、採光、環境にやさしい冷暖房装置等を考慮した居住空間近代化のモデル的な意味もある。現在、今井町町並み保存会が活動拠点として管理、運営する。

◆^{むらさき}夢ら咲き長屋（橿原市来訪者案内所兼休憩所）

休憩施設や土産物店の入ったテナント施設で、「橿原市観光ボランティアガイドの会」のガイドが待機しており、観光客に町の説明や道案内をしている。

◆「今井まちや館」

18世紀初期に建築されたと推定される、長らく空家になっていた「金物屋又兵衛住宅」を復元し公開する施設。内部が公開され、江戸期の建築様式や生活ぶりがうかがえる施設である。

◆今井景観支援センター

安政3年（1856）築の町家を、橿原市が今井町のまちづくり・景観づくりを支援するため、展示・イベント空間として整備したもの。事務所スペースは今井町並保存整備事務所として利用している。



深刻化する高齢化と空家問題

今井の人々は、歴史的価値がある町並みとはいえ、いたずらに観光地化するよりは、閑静な住宅街としての保存を目指し数々の施設を整備してきた。

しかし、少子高齢化の進展は今井町でも例外ではなく、老朽化し空家となっている建築物や放置された空地が100件以上（平成16年度調査）に上り、景観が失われつつあるとともに、町の活性化をさまたげ、いずれはコミュニティを維持することができなくなるのではないかという危機感も生じている。

そのなか、空家・空地対策、コミュニティの活性化、また、商業・観光も含めた今井町の在り方について、官民を挙げての検討が行われている。

■NPO法人今井まちなみ再生ネットワーク

今井町町並み保存住民審議会の呼びかけで今井町におけるNPOの可能性が提起され、有志による取り組みが進められた結果、平成18年3月、特定非営利活動法人（NPO法人）「今井まちなみ再生ネットワーク」の立ち上げに至った。

そして、将来にわたり、持続可能なまち、まちなみを構築しくことをテーマとして掲げ、まず、空き家・空き地の再生・活用に取り組むとともに、今井への「思い」や「志」をもった町内外の人々に積極的に参加を呼びかけることにより、まちに賑わいをとりもどす様々な事業を展開している。

◆空家等活用事業（サブリース事業）

この今井まちなみ再生ネットワークの中心的活動ともいえるものが、発生した空家と、新しい居住者・ユーザーをマッチングさせることである。

しかし、特に借家においては、傷みが進んだ場合、伝統的な建築を維持しようとするれば建築費が膨らむことから、オーナーが改修をためらうことが多い。

そのなか、NPO法人として画期的といえる、空家のサブリース事業がスタートした。この事業は、NPOが行政の伝統的建造物の補助金と自己資金を事業費として、空家を借り上げ、伝統的様式を活かしながら現代的な機能を備えた修理・改修を行い、今井に住みたい・活用したいとするユーザーに転貸しし、オーナーへの収益分配と自己資金の回収を図ろうとするもので、現在1件が運用を開始された。

ただ、自己資金については、現状は、役員を中心とした有志の出資で成り立っており、広く出資者を募ることが課題となっている。

◆まちなみ保全型ツーリズム（まるごと昔体験）

現代の生活では体験することが難しい伝統的な暮らし方や伝統文化を、地区内の重要文化財や伝統的町家を教室として、子供たちが実際に楽しみ、体験するプログラム。実際に宿泊もして、子供たちの、歴史的な町家文化への理解を深めるとともに、まちづくり学習の現場をも体験してもらうことができる。

◆町家等利活用促進事業

今井町の空家・空地状況の調査、オーナーの意向調査を踏まえ、町家等利活用促進の課題を抽出し、その解決策を策定しようとする。この事業を通じて、今後の具体的活動方針として、奈良県内の歴史的地区空家バンクネットワークの設立、生活体験用滞在施設の整備、エリアマネジメントを行える「まちづくり会社」等の可能性検討が始まった。

◆地域住宅モデル事業普及推進事業（「生活体験用滞在施設」整備）

今井町での定住を促進するため、多様な伝統的町家暮らしを実際に体験できるように町家を改修し、UIJターン希望者や観光客が町家暮らしの

サブリース事業で再生された町家
(写真提供：今井まちなみ再生ネットワーク)



宿泊体験の場所となる町内唯一の宿泊施設、かうんてい民家民宿「嘉雲亭」

現代性や機能性、情緒のある暮らしを再発見できるよう、滞在型の施設を作ろうとする事業である。

歴史資産を活かした都市づくりに向けて

今井のまちづくりについては、行政から住民へ事業主体がシフトしつつあり、現在、先の「今井町町並み保存会」「今井町町並み保存住民審議会」のほか、建築の技術的な面での協議の場として「今井町区域街なみ環境整備協議会」、また、18の「自治会」があり、さらには、NPO法人今井まちなみ再生ネットワークの活動もますます活発化している。

少子高齢化が全国的に問題化する中、今井町も例外ではなく、特に、空地・空家化は、町並みや住環境の崩壊につながるとして対応が急がれている。

そこで、現在、今井まちなみ再生ネットワークを中心として、奈良県内の歴史地区、不動産や建築の専門家、行政などが一体となり、広域的な「町家バンクネットワーク」の構築に向けての取り組みが進んでいる。歴史的な町並みが持つ価値と上質の暮らしを、さらに、広く・多くの人に呼び掛け、次の世代に引き継げるコミュニティの維持を目指して新たなスタートが切られた。

(山城 満、井阪英夫)